地域の宝
但馬牛物語
★25★

故郷回帰に新チャンネル

渡辺　大直

6月。牧場公園はベビーラッシュだった。13日に2頭、17日に1頭、続けて子牛が生まれた。そんな中、県庁地域創生課の企画官が東京からお客さんを連れてきた。

お客さんは〝カムバックひょうご東京センター〟と〝ふるさと回帰支援センター〟の相談員さんだった。カムバックひょうご東京センターは県の機関で、去年1月にできた新しい部署だ。

今、我が国の人口は東京圏に一極集中している。大阪、名古屋圏への人口集中は収まったが、そのせいか兵庫県は転入してくる人より転出する人が多い。2016年の転出者数から転入者数を差し引いた転出超過人数は6760人で、全国で3番目に多く、転出超過した人は20代の若者が85％を占めている。このペースでいくと、60年には兵庫県の人口は約100万人減り、65歳以上の高齢者は39％にまで増えると見込まれるそうだ。

そんなことから、UターンやIターン、Jターンなど兵庫県に帰りたい、移住したい人への相談、住居や就職先の紹介、先輩移住者の情報発信などを行い、兵庫県への移住を呼び掛けようと、県はカムバックひょうご東京センターをつくり、今年2月には神戸にも同様の部署を開設した。

ふるさと回帰支援センターも同じく地方への移住、定住に向けた相談や支援活動を行っているNPO法人だ。

ヤッパリみんな都会志向なんだと思いきや、ふるさと回帰支援センターによると、相談や問い合わせ、セミナーの参加者は年々増加し、特に15年以降の伸びは大きく、地方に移住、定住を考えている人は増えているという。

牧場公園にも但馬牛農家になろうと、地域おこし協力隊として、但馬牛の飼育技術を学びながら頑張っている2人の若者がいる。企画官が相談員さんたちを牧場公園に連れてきた狙いは、彼らの話を聴かせることにもあった。

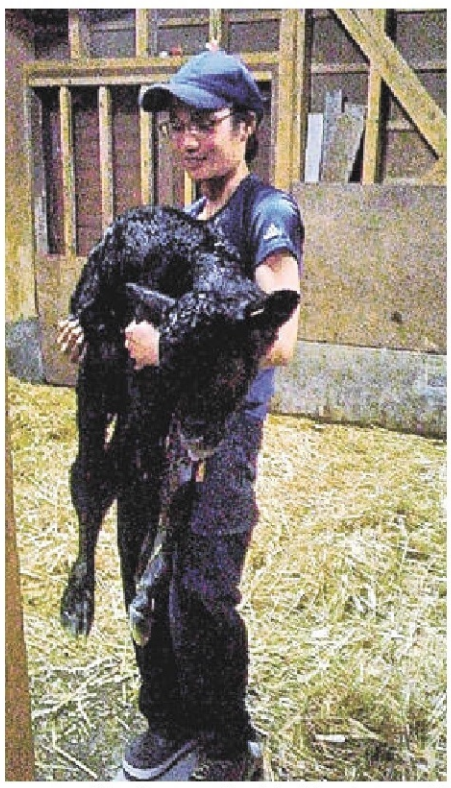
但馬牛博物館を案内し、相談員さんと話していると、今の若い人たちの価値観はとても多様化していて、生活に便利で、就労機会も多い都会志向だけでなく、むしろ他所の血統を交えない閉鎖育種を続け、世界で兵庫県でしか生まれない〝但馬牛〟に魅力を感じる若い人が結構いるのではないかとすら思えてきた。

また子育てが一段落した世代も、安らぎや自然豊かな生活環境を求めて、故郷に帰りたい、地方に移住したいと考えている人が増えているそうだ。

問題はそういった人たちに兵庫県や但馬、但馬牛のことを伝えるチャンネルが無かったことなのだろう。カムバックひょうご東京センターやふるさと回帰支援センターはその新しいチャンネルになるのかもしれない。

新温泉町は、本年度かつての畜産試験場見方試験地跡地に、新たに但馬牛飼育を志す人をサポートする牛舎などを備えた施設を整備する。これは但馬牛で但馬に移住しようとする人への受け入れ態勢ということになるだろう。

こんなお客の訪問があった時生まれた子牛たちだ、きっと真価を発揮し、魅力をイッパイ発信してくれるだろう。


生まれたばかりの但馬牛の子牛。魅力を発信してくれるはず

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます